

2011年 秋期 保護者会資料 Contents ー目次ー

ご挨拶 P.2～P.5
英語科より P.6～P.17
数学科より P.18～P.29
国語科より P.30～P.35

ご 挨拶

大学受験グノーブル 代表：中山 伸幸（英語担当）

本日はお忙しい中、ご参加いただきありがとうございます。

おかげさまで、グノーブルはこの夏に開校 5 年を迎えることができました。これも皆様のご支援あつてのことと、心より感謝しております。学習環境や教材をなおいっそう整え、研修を重ね、今まで以上に、生徒一人ひとりに眼差しを向けた指導態勢を整備していきます。

今年度の環境面の改善としては、まず、新宿本館、1 号館の各フロアに防災用品を整えました。9 月末に移転した渋谷新本館においても 11 月初旬に設置の予定です。

その渋谷新本館には個別の机を採用しました。従来のもとの使い心地の差などをみていき、今後に活かしていきます。余談ですが、渋谷新本館に移って間もないある日、階段を元気に上がり降りしている男子生徒に気付き、「何か探しているの？」と尋ねたら、「(ビルが) 新しくてきれいなのであちこち見て回りたいくて！」という答えが返ってきました。新築ビルに移れて嬉しさを感じているのは私たち職員も同じです。新しさは、やはり人の気持ちをかき立てるものです。設備だけでなく、授業がいつも新鮮であることの大切さをあらためて感じた次第です。

受付職員も夏以降増員できました。従来からのスタッフと共に、生徒たちが勉強に集中できる環境整備に意欲的に取り組んでもらっています。どうぞよろしくお祈りします。

冬からは J R 御茶ノ水駅からほど近い場所に新教室を開校できる運びとなりました。以前から東方面への教室展開はご要望が多かったのですが、冬期講習から授業を始めます。当面は新高 3 生の英語・数学、高 1 生の数学の開講です。全学年の開講というわけではなく申し訳ありません。足元を固めながら学年・科目を増やしていきますのでご理解ください。

学習環境とは言えないかもしれませんが、グノーブルのロゴタイプも一新し、シンボルマークを新たに加えます。受験生を励ますことができ、同時に私たちが大切にしている理念を象徴できるロゴマークを目指しています。近いうちに発表させていただきます。

◆未来につながる力

私たちの塾は大学受験塾ですから、生徒の皆さんの受験勉強をサポートすることが第一の役目です。しかし、時代は激動しています。進学塾だからといって単に合格請負人であれば良いというわけにはいきません。一流大学に合格さえすれば「勝ち組」という時代はとうの昔に去っているからです。

生徒たちが志望大学に合格し、大学で活躍でき、その先にある夢に力強く向かって行ける土台作りに携わっていくことが大切だと肝に銘じております。詰め込み勉強で生徒たちの可能性を摘み取ったり、単にテクニックで合格点を取ろうとする指導を行ったりすることは、出来る限り慎まなくてはなりません。

大学側も、受験テクニックを備えているだけの学生を求めてはいないはずですが。たとえば、東大の濱田純一総長は、「タフな東大生」という表現をよく使われています。激しく変動し、先の読めない今の時代を「危機」と認識された上で、東大生には「タフ」であって欲しいと、入学式の式辞や著書の中で繰り返し述べられているのです。「タフ」というのは、知識と思考力に加え、それを活かす体力・健康を具えていること、さらには、コミュニケーション能力があることだと定義されています。グローバリゼーションの時代にあつては、言葉の差を超え、価値観や人生観の異なる他者と理解し合い、論じ合えるコミュニケーション能力は特に大切になると強調されています。

私たちの身の回りで起こっていることを見渡してみても、すばらしい学歴があるだけで、内実が伴わなければ生き抜けないことはすぐにわかります。一人ひとりの生徒たちが、個を確立して生きる力を身につけ、意欲的に前進できることが求められているのが現代だと思います。だからこそ、今この中学・高校時代にどのような基礎力を培うか、自我の確立・自立の準備期であるこの時期をどう有意義に過ごすかは本当に大切な問題ではないでしょうか。

学歴が大ききものを言った時代であれば、どんな手段を使ってでも、ヘリコプターに乗ってでも、人におぶさってでも、山頂である一流大学合格を勝ち取れば良かったのです。しかし、現代においては、一流

大学入学は山頂到達ではありません。スタート地点に過ぎないのです。今求められているのは、生徒が自らの脚で歩きとおせるように基礎力を鍛えることです。学力の向上とともに、生徒の内側がしっかりと成長していることです。大学受験という大きな課題を、生徒が自分で引き受け、自分の責任で乗り越えていけるよう、大人は一步引いた立場から見守り、援助していくことが求められるのではないのでしょうか。

受験指導をしている私たちの実感としても、生徒が自ら勉強に向かう姿勢を育むことこそが大切だと思います。やらされている勉強ではどこかに歪みが生じたり、早々に限界を迎えたりという結果になりがちです。また、過保護な環境では、困難に立ち向かう気概のないひ弱な生徒になり、この先の人生に必ず待ち受ける試練を乗り越えられなくなってしまうでしょう。過保護は、子どもたちを保護するのではなく、スポイルしてしまう恐れがあります。すべてが順調に進んでいくことよりも、ときには失敗を通してこそ学べるという気構えが大人には必要でしょう。成績が伸びずに自信を失いかけたり、勉強に向かう気持が失せたり、歯が立たない難問と何時間も何日も向き合ったり、さまざまな行事や活動との両立に悩んだりするところから、あるいはそういう状態に直面してこそ、生徒たちは成長していきます。

◆「知」の開花から先へ

子供たちの「知」の成長に、大人がどういう態度で接すればいいかは大変難しい問題だと思いますが、次のように考えることもできるのではないのでしょうか。

幼いころの子供たちはファンタジーの中に暮らしています。やがて、身体とともに内側も成長し、「知」の世界に足を踏み入れていきます。ときに、それはエポックメイキングな「事件」になることもあります。

アインシュタインは、買ってもらった方位磁石がいつも同じ方向を向いていることに強烈な興味を覚え、それがきっかけとなって知の世界へと進んでいったという話をご存知の方も多いでしょう。あるお子さんは、はじめて望遠鏡で星を覗いたとき、「お母さん、星が丸い！」とあわてふためいたそうです。火星や木星などの惑星は、小さな望遠鏡でもかなりはっきりその姿を見ることができそうですが、その形は決して☆ではありません。星は☆形だと思っていたその子にとっては真実を知った驚愕の瞬間です。

多分、皆さんのお子さんにもこのような時期が過ぎて訪れたはずですが。知的な好奇心が芽生え、知的に考える準備が整ってきた子供の姿は微笑ましく、将来が楽しみです。多くの場合、この時期から中学受験の頃までは、親御さんが大きく関与されていく時期です。年齢に合わせた知識を授け、考え方を徐々に教えていくことで、子供たちもどんどん伸びていきます。大人の責任で、ときに褒め、ときにしかるといった引っぱり方で子供は成長していきます。塾の選択にも大いに親が関わることになります。私たちがかつて行った調査でも、中学受験の塾選びにおいては、9割方お母様がお決めになっていました。

語弊はあるでしょうが、中学受験までのこの時期を「親子の蜜月時代」と言ってもいいかもしれません。（「蜜」ではなく親子関係が「密」です。）お母様がお子さんの知的な面での成長に大きな責任を担われ、そのご苦労は大変だと思いますが、積極的に関わることで喜びもお感じになられたのではないのでしょうか。

しかし、中学に入ると、徐々に親離れ・子離れの時期を迎えなくてははいけません。問題は、どういう形で迎えるかです。

◆親と子の距離

中高生の受験指導をしてきた中で、私たちは、ふたつの典型的な問題ある型を目にしてきています。

ひとつは「即刻大人扱い型」、もう一つは「自立阻止型」です。

前者は、「中学生になったのだから自分の責任でやいなさい」とお子さんからすぐに距離を置いてしまう接し方です。自主性を重んじているように見えながら、実は責任を放棄しているのかもしれませんが。中学受験時に保護者が積極的に関わっていたご家庭では特に、「これからは自分でやいなさい」と急に言われても、お子さんはとまどってしまうでしょう。中学生の段階ではまだ自己コントロールができないのが普通です。放っておくと、中学の時期に身に付けておきたい、中学時代でなくては身に付けるのが難しい知識や考え方が大きく抜けてしまいます。恐ろしいことに、大半の学校でもフォローしてくれないのが現状のようです。「生徒の自主性を重んずる」、「詰め込みは行わない」などの、それ自体は立派な主義のもとに、大切な基礎力が培われていない例を私たちは多数見てきています。

後者の「自立阻止型」では、お母様が先回りしてあらゆることを手配されています。子供たちは勉強も

身の回りのことも、お母様の下でしっかりやっていますから、学年がそれほど上でないときには「成績のいい子」です。しかし、お膳立てされた「作業」をこなしてきた生徒たちの知識は、多くの場合役に立たなくなっていくます。やってきたことを覚えてはいるのですが、「知識と知識を組み合わせる」、「知識を編集し応用する」、という段になると途端に頭が止まってしまいます。上の学年に進むにつれて、大量の知識を扱うようになりますが、知識を咀嚼し整理する習慣の身につけていない生徒は、難度が上がると新しいことがらを覚えることさえもできなくなっていくます。興味を持って勉強をしてきたわけではないので、どの科目もぱっとせず光る教科がありません。やがて、真面目には取り組んでいるのに成績が伸びないという壁に当たることとなります。

◆環境・場の持つ力

中学・高校期は、自我の確立・自立の準備をしていく大切な時期です。生徒たちの内側から「やってみよう」と心が動きだすところから主体性が育まれていきます。それには「環境・場の持つ力」が働くように整えていくことが重要ではないでしょうか。

私たちのような塾に求められているのも、自然に勉強に向かえる雰囲気を提供することだと考えています。将来にまで続いていく勉強（学問）において基礎はとても大切ですが、それは、生徒たちが自ら好奇心を持って取り組み、「こういうことか!」と納得して、頭の中に整理して築いていくものです。理解が伴い蓄積された知識・ものの考え方は、大学受験でも大いに力を発揮し、大学入学後にさらに高度な知の礎になり、いずれ独創性になって花開いていく可能性を持ちます。

塾の教師は、クラス全体の進路や速度をコントロールしながら、一人ひとりにも目を向けていきます。成長が実感できる教材を用意し、解くことや考えることに夢中になれる良問を用意します。「宿題をやること、授業中には真剣に取り組むことは当たり前」という雰囲気作りもしていきます。良きライバルが集う環境も整えていくよう心掛けています。周りの仲間からの刺激は大変大きな効果を持つからです。

◆想像力のひ弱な翼

普段、大学受験学年の英語を担当している立場から、気になっている二つの点にも、ここで触れておきたいと思います。

ひとつは、今の生徒たちの想像力の翼が、ある面においては、かわいそうなほど貧弱になっているかもしれないという危惧です。

人間には空を飛ぶ翼はありませんが、古来、想像力の翼を使って、大空よりもはるかに広い範囲を自由に駆けてきました。創作活動はもちろん、科学技術も、社会組織も人の想像力のたまものです。他者の立場に立てるのも、人と共感ができるのも想像力の素晴らしい力です。

その想像力の成長には、文字で書かれたものを読むことが随分大きな役を果たしているのではないのでしょうか。「川の向こうから、大きな桃がどんぶらこ、どんぶらここと流れてきました。」という言葉によって、読む者はそれぞれ様々なイメージを思い浮かべます。小説の主人公にすっかり感情移入して、食事の時間も忘れて読みふけているときには、もはや現実の世界ではなく、想像力の世界にいるのだと言えるでしょう。読書好きの子どもの中には、本の中にイラストがあっても目を向けるのをいやがる子がいます。自分の想像力を働かせて本を読み進めたいからです。

ところが、今の子どもたちは、幼い頃から大量の映像情報を押しつけられています。活字を読むより手っ取り早い娯楽の洪水の中にいます。その結果、文字を見ただけで、その内容を活き活きと実感する想像力が欠けてしまっているのではないのでしょうか。電卓ばかり使っていると暗算ができなくなるように、ワープロばかり使っていると漢字が書けなくなるように、映像情報にばかり触れていると、文章から内容を創造して理解する力が衰えるということがあるのではないのでしょうか。

大きな桃の様子を思い浮かべられるかどうかのレベルに問題は留まらないと思います。内容が抽象的になればなるほど、論理が複雑になればなるほど、その中身を深く理解できていないらしいという場面に、授業ではよく出くわします。難解な語彙を知らない、ということもあるかもしれません。背景知識がないから読めない、ということもあるかもしれません。とにかく、文字情報の奥にある中身を理解できず、論理の展開についていけない生徒たちは少なくありません。

私たち大人が責任を持って対策を立てて行く必要があるように思います。

◆単語帳暗記の落とし穴

想像力が働かないことに加え、もうひとつ気になることは、丸暗記の弊害が言われてから久しいのに、生徒たちが未だに単語帳暗記の犠牲者になっているという点です。

私たちの学生時代には、「英語の勉強＝単語・熟語の暗記」でした。その悪しき伝統は今日に至るまで綿々と続いているらしく、多くの学校では単語帳の暗記を課題にしています。確かに語彙の習得は語学の要ですが、英単語の訳をただ覚えていくという学習には大きな落とし穴があります。

授業中での例を挙げてみます。高校3年生のこの時期には、よく段落整序題を扱いますが、あるとき次の英文で始まる問題を読んでもらいました。(段落整序題というのは、バラバラになっている段落を論理的に並べる力を試す問題です。)

The earliest Greek philosophers are sometimes called natural philosophers because they were mainly concerned with the natural world and its processes.

「古代ギリシアの哲学者たちは、ときに自然哲学者と呼ばれるが、主に関心を寄せていたのが自然界とその過程だったからである。」

下線を引いた部分 its processes は、「その過程」と訳せば、確かに正しいのですが、問題は、『日本語に訳すと内容も理解できた気になる』ということです。

「その過程ってどういう意味でしょう？」とこちらが発問すると、キョトンとする生徒がいます。日本語に置き換え終えた時点でもう理解できているつもりですから、何を訊かれているのかわからないのです。

これは、「もの名前が分かると、そのものが分かった気になる」ということに似ています。

私は草花に詳しくないので、散歩中には家内との間でよく次のような会話になります。

「このかわいい花は何だっけ?」「それはミゾソバ。」「ああ、そうだったね。」

名前がわかると、不思議と分かった気になれるのです。実際には何も分かっていないにもかかわらず。名前がわかると「なるほど」と思えて視線を離していきますから、結果として、家内に何度教えられても、また「何だっけ?」となってしまうのです。

英単語の日本語訳を覚えることは、これに似ています。訳がわかると分かった気になってしまい、内容理解にまで頭が回らず、表面だけなぞっていつてしまうのです。

先ほどの英文の数行先には次の英文が出てきます。

The philosophers observed with their own eyes that nature was in a constant state of transformation.

「その哲学者たちは、自分の目で、自然が常に変化している状態にあるのを観察していた。」

この下線部分が、先ほどの its processes と同様の内容を指しているとわからなければ、うまく段落を並べ替えることは不可能なのですが、「訳せれば分かっている」という生徒には二つの下線部の共通性が見抜けません。

段落整序題を苦手になっている生徒はたくさんいます。もちろん、大きな枠組みでの論理構成力がなければ正解には至れないのですが、英文をしっかりと理解しながら読む姿勢を身につけさせる指導が先決です。これからの時代に必須である高いレベルの英語力を具えられるよう生徒たちを導く立場としては、「英語の勉強＝単語・熟語の暗記」という方針では誠実な教育とは言えないと思います。

◆生徒たちが将来活躍できるように

私たちが子供の頃、日本に暮らしている大半の子どもたちにとって「未来」という言葉は輝いていたと思います。今の生徒たちの目には「未来」はどのように映っているのでしょうか。

大人である私たちに出来ることは、生徒たちが「知の力」を身に付け、未来を切り開いていけるように、一人ひとりと誠実に向き合っていくことだと思います。

これからも、生徒たちの役に立てるよう、職員一同、力を尽くしていく所存です。そのためにも、本日の会では、皆様からの貴重なご意見をお聞かせ下さいますよう、ぜひ宜しくお願い致します。

1. 英語を読む

次の文章は、Apple Computer の創設者で先日亡くなられた Steve Jobs 氏が、2005 年 6 月、スタンフォード大学の卒業式で述べた祝辞の一節です。

Sometimes life hits you in the head with a brick. Don't lose faith. I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did. You've got to find what you love. And that is as true for your work as it is for your lovers. Your work is going to fill a large part of your life, and the only way to be truly satisfied is to do what you believe is great work. And the only way to do great work is to love what you do. If you haven't found it yet, keep looking, and don't settle. As with all matters of the heart, you'll know when you find it. And, like any great relationship, it just gets better and better as the years roll on. So keep looking. Don't settle.

時として人生ではレンガで頭をから割られるようなことが起きるものです。(しかし)信念を失ってはいけない。私を駆り立ててくれたのはただ一つ、自分のしていることが大好きだという気持ちだったと、私は確信しています。皆さんは自分が大好きなものを見つけなければいけない。それは仕事でも恋人でも同じように当てはまります。皆さんはこれから仕事が人生の大きな部分を占めていくでしょうが、自分が本当に心の底から満足を得たいなら進むべき道はただ一つ、自分が素晴らしいと信じる仕事をするだけです。そして素晴らしい仕事をしたなら進むべき道はただ一つ、自分のする仕事が好きであることです。まだ見つからないなら、探し続けること。落ち着いてしまっはけません。心の問題と一緒に、そういうのは見つかるどピンとくるものです。そして素晴らしい人間関係と同じように、年を重ねるにつれてどんどん良くなっていく。だから探し続けること。落ち着いてしまっはけません。

英語で文章を書いたり、英語で話をしたりするには**英語を発信する力**が必要ですが、それより前に、英語の文章が読め、英語を聞いて分かるという**受信する力**を身に付けていかねばなりません。ここで留意していただきたいのは、受信とは「読んで[聞いて]意味が分かること」であって、必ずしも「和訳することではない」ということです。例えば **This is my house.** のような文であれば、中1の夏を過ぎる頃にもなればイメージが脳裏に浮かび、和訳しなくても意味は分かるはずですが、しかし内容が抽象的になりイメージしづらくなると、日本語に置き換えた方が分かりやすくなります。冒頭の文章はテーマが生活に密着したもので抽象度が高いとはいえませんが、高校生になってから **GNOBLE** の門を叩く方のほとんどがこのレベルの英語が読めないのが実情です。以下のように読むのが **GNOBLE** 流で、授業の時にもこのように解説します。例として下線部を取り上げます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) **that the only thing** 唯一のこと(どんなこと?) **that kept me going** 私を進ませ続ける **was** は…だった(何だった?) **that I loved** 好きだったということ(何を?) **what I did** 私のすることが、

和訳問題の答案としてこのまま解答欄には書けませんが、十分に受信できていることはお分かりいただけると思います。また、英語力が高まるにつれて、区切れ目は少なくなっていくます。

I'm convinced 私は確信している(何を?) **that the only thing that kept me going** 私を進ませ続ける唯一のことは(どんなこと?) **was that I loved what I did** 私のすることが好きだったということ、

要するに「英語を読む」には、以下のようにすれば良いのです。

区切りを見つけて意味を捉え ⇒ 自然に湧いてくる疑問と共に ⇒ 左から右に読んでいく

2. 英語を聞く

「読む」際には文末のピリオドに到って「あれ？(分からない)」と感じたら、時間は失いますが文の初めに戻って読み返すことが可能です。しかし、冒頭の一節は『祝辞』として語られたものでした。「英語を聞く」場合には、音は聞こえた刹那すぐに消えてしまいますから、前に戻ることはできません。英語の語順のまま受信する必要は一層高まります。(ただし、聞く場合には話し手が意味の切れ目で一瞬ポーズを入れますので、意味の切れ目を誤解する可能性は低くなります。もちろん、英語を聴き取る耳が鍛えられていることが前提の話ですが。)

3. 文法力と語彙力

さて、ここで問題が2つ生じます。1つは**どうすれば区切りを正しく見つけられるか**ということ、もう1つは**どうすれば区切りの内側の意味が分かるか**ということです。

「区切りを見つけて」と言うのは簡単ですが、英語を読めない人は区切りを正しく見つけられませんが、例えば先ほどの下線部を

I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did.

のように区切ってしまったらどうでしょうか？正しく受信できる見込みはゼロです。また、convince という動詞を知らなければ、I'm convinced の意味は分かりません。そこで、**文法力と語彙力**が必要になります。

▼文法力＝区切りを見つけ、区切り同士の関係を掴む力

GNOBLE では、特に中学生の間は**英文法**を重視していますが、それはテストの文法問題に正答するためというよりむしろ、**区切りを見つけて区切り同士の関係[構文]**を把握する力を培うためです。先ほどの下線部は、文法[構文]的には、I'm convinced_(SV) に続く that 節が

[^①that the only thing_(S) (^②that kept me going) was_(V) [^③that I loved [^④what I did]]_(C)]_(O) で

①that は接続詞。be convinced の目的語になる[名詞節]を導いている。

②that は関係代名詞。先行詞である that 節内の主語_(S)を修飾する(形容詞節)を導いている。

③that は接続詞。that 節内の動詞_(V)の補語になる[名詞節]を導いている。

④what は関係代名詞。loved の目的語になる[名詞節]を導き、節内で did の目的語になっている。

のように(我々英語教師は)説明できますが、英語のネイティブはいちいちこのような分析をしながら読んでいたわけではありません。それは、我々日本語のネイティブが日本語の文法を意識せずに日本語を運用しているのと同じことです。

ここで気をつけなければいけないことがあります。それは、**ネイティブは文法を意識していないだけであって、文法をしっかりと身に付けているのだ**という事実です。日本語のネイティブであれば、「『動く』という動詞は五段活用する動詞だから、『ない』に接続するときには未然形の『動か』という活用形を用いるのだ」などと分析することなく、「『動かない』は正しいが『動かくない』は間違いだ」と瞬時に判断できますが、それは、文法が身に付いているからできることなのです。

GNOBLE では**英文法**を身に付けるために、中学生テキストの基本例文＝Sentences for Workout を全て*GSL 化し、*Workout を通じて意識せずに運用できるように指導しています。以下の英文は全て Sentences for Workout からの抜粋です。*GSL と*Workout については本資料の4. と5. で説明します

①that: We are happy **that** you saw your mother again. 【中1E4 タームテキストより】

②that: The novel **that** was written by the writer won the prize. 【中2夏期講習テキストより】

③that: My first impression was **that** he was really funny. 【中3夏期講習テキストより】

④what: I don't believe **what** you've just said. 【高1G4 タームテキストより】

Workout によって以上の文法事項をしっかりと身に付けている生徒は、I'm convinced **that** the only thing **that** kept me going was **that** I loved **what** I did.を切れ目を見つけながら、返り読みすることなく、一度で意味を捉えることが可能です。

(英語科資料の最後に『参考資料2』としてここで引用した GNOBLE 英語テキストの文法説明部分を抜粋してあります。また、引用文中の下線部は、難しい語は1つありませんが、正確に意味を捉えるにはしっかりとした文法力が必要です。読み書きに必要な文法力の有無を確認したい方には、指標としてお読みいただけます。)

▼語彙力＝区切り内の意味を捉える力

GNOBLE では中3から大学入試レベルの長文を読み始めます。文法を習得している生徒でも、英文の中に知らない語がたくさん出てきます。**語彙の壁**にぶつかるわけです。

未知の語があっても文脈から想像することは可能ですし、そうすることは非常に大切です。しかし一文の中に3つも4つも意味の分からない語があれば、想像するにも限界があります。そこで、相談に来る生徒がいます。「先生、単語がわからないから長文が読めません。市販の単語集を買って覚えようと思うのですが、どの単語集がおススメですか？」我々は回答します。「単語集で英単語と日本語訳を一対一対応で暗記するようなことはしないでください。板書で説明した語彙解説を写した『**語彙ノート**』を作って頻繁に目を通し、英語の本文を**音読**の Workout(後述)で頭に沁みこませてください。辞書を引いたら、必ず**語源**の説明を読むようにしてください」と。

漢字を「偏(へん)や旁(つくり)」を組み合わせると意味が類推できるのと同じように、英語の語も、『**接頭辞**＋**語根**＋**接尾辞**』の組み合わせで**意味をイメージ**することができます。例として、**dict** という**語根**と**接頭辞**・**接尾辞**の組み合わせを挙げます。【 】内が意味のイメージ、「 」内が訳語です。

dictate = **dict** 言う＋ate…させる ⇒ 【言いつける;言って書き取らせる】「命令する;書き取らせる」

>dictator = dictate＋or…する人「独裁者,権威者;口述者」

>dictation = dictate＋ion 名詞語尾 「指図,指令;書き取り」

diction = **dict** 言う＋ion 名詞語尾 ⇒ 【言うこと,言い方】「言葉づかい,言いまわし」

>dictionary = diction＋ary…に関する場所 ⇒ 【言いまわしが収録されている場所】「辞書」

predict = *pre* 前もって＋**dict** 言う ⇒ 【前もって言う】「予言する」

>prediction = predict＋ion 名詞語尾 「予言」

contradict = *contra* 反対に＋**dict** 言う ⇒ 【反対を言う】「反論する;矛盾する」

>contradiction = contradict＋ion 名詞語尾 「反論;矛盾」

>contradictory = contradict＋ory 形容詞語尾(…の性質がある)「反抗的な;矛盾した」

先の下線部に出てきた convince であれば、GNOBLE の授業ではどの講師も、**接頭辞 con** 全く、すっかり＋**語根 vince** 征服する ⇒ 【完全に(精神的に)征服する→思い込ませる】「納得させる,確信させる」のように板書して、同じ**語根**を含む convict, victory, victor, invincible などにも言及します。

高校生にもなると生徒は電子辞書を持ち歩くようになりますが、電子辞書に入っている英和辞典はほとんどが大修館書店の『ジーニアス』です。『ジーニアス英和辞典』(第4版)で convince を引くと見出し語と発音記号のすぐ後に、【原義:完全に(con)征服する(vince) →説得する。[派] → conviction(名)】と説明されています。その兄貴分に当たる『ジーニアス英和大辞典』を引くと、【初16C;ラテン語 convincere(征服する)より. con(完全に)＋vince(征服する). convictと同語源. cf.

victory, victor】と、より詳しく解説されています。また、三省堂の『ウィズダム英和辞典』（製本されている辞書を購入すると、無料でウェブ版が利用できます）では

con・vince ^{*} /kənˈvɪns/ 【音声】 [con(完全に)vince(征服する)] ((名)conviction, (形)convinced, 以下省略…

と出ています。英和辞典を引いたらこれらの説明を読むのを習慣にすることが必要です。

単語集で単語を覚えようとする試みは、泳げない人が、泳ぐのに必要な筋肉をウェイトトレーニングをして鍛えようとするようなものです。効果が全くないとまでは言いませんが、それが泳げるようになることには直に結びつきはしません。泳げるようになるには、泳いでみるしかないのです。泳いでいる(=英語を読んでいる)内に、泳ぐのに必要な筋肉(=語彙力)は自然と身に付いてゆきます。

4. GSL[GNOBLE Sound Laboratory=グノーブルの音声による演習]



GNOBLE の授業では英語の仕組みを**理解**してもらうことをとても大切にしていますが、英語はコトバですから、理解したことを**身に付ける**訓練をしなければいけません。そのトレーニング[ワークアウト]をするために、6 学年全てに GSL という音声教材を導入しています。中学生は文法テキストの基本例文[Sentences for Workout]の音声を、高校生は長文の音声を、ウェブサイトで配信しています。暗証番号を入力して、MP3 形式で音声を簡単にダウンロードできます。

中学生には、Sentences for Workout の基本例文を**何度も聴いて音読し、暗誦できるくらい親しんでくる**という宿題を全学年・全クラスで課しています。翌週の授業の最後にその中から 3 本の英文を放送して書き取らせ、定着度を確認します。これによって英語の音を聴き取る力がついていくだけでなく、理解できたことが身につき、語彙も自然に増えていきます。

高校生には**長文の音声を配信し、授業で解説を聞いたのでしっかりと理解できている長文を繰り返し聴き、何度も音読するように指導**しています。音読すると返り読みができないので、英文の意味を前からカタマリごとに捉えていくことができるようになります。このやり方でスラスラ音読できる長文を一つ一つ増やしてゆくと、初見の長文でもかなりのスピードで読めるようになります。

5. 受講効果を上げるために

▼休まず・遅れず

英語の授業は中1から高1までは年間に 50 回です。受講して伸びる生徒は欠席も遅刻もせずに【宿題⇒授業⇒復習…】のサイクルを生活に組み入れている方です。【授業】を**休むと**、授業中の緊張感を持った演習ができず、演習後の痒いところに手が届く解説を聞けなくなるだけでなく、その前後の【宿題…復習】の**学習サイクル全てを失う**こととなります。中学生であれば、新出単元の導入授業も受けられなくなります。また、部活など理由はあるのですが、遅れてくるのも感心しません。5 分でも遅刻するなら、振替授業に出席することをお勧めします。

▼宿題と復習

英語科では、中1から高3の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなくてはなりません。これをやらずに漫然と授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

宿題をしっかりとやるのは最低限のことで、英語力が伸びるかどうかは Workout を継続して行うことにかかっています。生徒の皆さんには繰り返し指導していることですが、確認のため掲載します。

▽中学生のワークアウト:小ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、継続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

—— 授業で「理解」したことを「身に付ける」ための具体的なトレーニング[Workout] ——

- ① **Listening**[聴き込み]:授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く(回数は全ての文が完全に聴き取れるまで)。電車の中での時間も利用する。
- ② **Retention/Shadowing**[口まね]:**Retention** は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する練習方法。**Shadowing** は、聞こえた英語をすぐさままねて発声する。
- ③ **Reading aloud**[音読]:②の **Workout** で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき5回。
- ④ **Recitation**[暗誦]:③の **Workout** の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗誦する。目安は一文につき10回。
- ⑤ **Dictation**[書き取り]:④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがいないかを確認する。

以上の **Workout** が終わったあとで、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているのです、スラスラと解けるはずです。

▽高校生のワークアウト:読解問題に関しては、以下のワークアウトを継続して行ってください。

- ① **Listening**[聴き込み]:授業で理解した **GSL** 対応の長文を題材にする。
 1. 音声を聞きながら、意味を意識しつつ目で英文を追いかける。慣れるまで繰り返す。
 2. 意味を意識しながら、繰り返し音声を聞く。(以上は電車の中での時間も利用する。)
 3. 音声を聞き、目で英文を追いかけて、まねして声を出す。口がうまく回るまで繰り返す。いずれの場合も、意味の切れ目を意識し、切れ目ごとに意味をイメージする。
- ② **Reading aloud**[音読]:授業で理解した長文を題材にする。スラスラ読めるようになるまで音読する。目安は最低10回。音読の効用は、具体的には以下の三点です。
 1. 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない[右から左へのいわゆる「返り読み」]ができないので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。= **1回読んだだけで分かる力がつく!**
 2. 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。= **速く読める力がつく!**
 3. 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているので、文法や語彙が記憶に残りやすくなる。
= **英語力そのものが向上する!**

6. 今後について

▼中1

▽クラス分けテスト

E1ターム2回目に実施したクラス分けテストの平均点は56.2点でした。新クラスの点数の切れ目は、 α クラス:70点以上、 $\alpha \cdot \alpha$ 1クラス:69点~46点、 α 1クラス45点以下となります。

冬期講習明けのF1ターム2回目の授業で次のクラス分けテストを実施します。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にしていただければと思います。

▽冬期講習

全4回の冬期講習では、第1日:動詞と時制①、第2日:動詞と時制②、第3日:助動詞、第4日:比較の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、単元としては全て復習となりますが、毎回、新しい発展的な事項も学習することになります。

▽冬期講習以降

F1 タームの 3 回は「不定詞入門」で、不定詞の副詞用法(目的と原因)と名詞用法を学びます。F2 タームの 4 回は「文型入門」で、品詞と文の要素と 5 文型を学習します。新中2の春期講習で「現在完了」を導入して時制を一通り学び終えた後、G1 タームより「準動詞」の本格的な学習が始まります。

我々講師の側から見ますと、英文法がしっかり習得できるかどうかの分水嶺となる大きな山が五つほど存在します。いわゆる『臨界期』(脳の言語回路が固定化する時期)以降、外国語として英語を学ぶにあたっては、この五つの山を順番通りに一つずつ、乗り越えてゆかねばなりません。

一つ目の山は「be 動詞の文と一般動詞の文の区別」で、それぞれについて否定文や疑問文・疑問詞を用いた疑問文に変形できる力が必要です。この山は中1の間に越えなければいけません。二つ目の山が「準動詞」の山で、不定詞・動名詞・分詞が、動詞の性質を残しつつも、文中では他の品詞の働きをすることをしっかりと理解した上で、自在に使えるレベルまで習熟することが大切です。この山は、基本事項については中2の間に、応用的な分詞構文などについては中3の間に越えたいものです。三つ目の山は接続詞・関係詞を用いた「複文」の山で、ここまでの山々を越えた人は、続く「仮定法」の山と「これらの組み合わせに習熟する」山は、比較的楽に越えることができます。

GNOBLE では中2の夏前に三つ目の山まで一通り導入が終わりませんが、生徒が習得するまで時間がかかります。しっかりと身につくまで、繰り返し復習していただきます。

来年度の新中2の通常授業は、今年度の中1同様、月曜(新宿)、木曜(渋谷)で開講予定です。

▼中2

▽クラス分けテスト

E1 ターム 2 回目に実施したクラス分けテストの平均点は 49.0 点でした。新クラスの点数の切れ目は、αクラス:65 点以上、α1クラス:64 点~40 点、α2クラス 39 点以下となります。

冬期講習明けの F1 ターム 2 回目の授業で次のクラス分けテストを実施します。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にしていただければと思います。

▽冬期講習

全4回の冬期講習では、『中学英語の完成』と題して、第1日:動詞とその周辺、第2日:不定詞・動名詞、第3日:分詞・関係代名詞、第4日:比較他の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、単元としては全て復習となりますが、豊富な文法の演習だけでなく、読解の演習も合わせて行います。

▽冬期講習以降

F1 タームの 3 回は「関係副詞・前置詞」で、普通は高校で学ぶ関係副詞を学習し、授業内で初めて前置詞を体系立てて扱います。F2 タームの 4 回は「文型—復習と応用—」で、5 文型の復習と、S+V+O+C の文で C に原形不定詞が来る形まで全て学習します。

来年度の新中3の通常授業は、今年度の中2同様、月曜(渋谷)、火曜(新宿)、土曜(新宿)で開講の予定です。

▼中3

▽クラス分けテスト

E1 ターム 2 回目に実施したクラス分けテストの平均点は 55.6 点でした。新クラスの点数の切れ目は、αクラス:70 点以上、α1クラス:69 点~50 点、α2クラス 49 点以下となります。

冬期講習明けの F1 ターム 2 回目の授業で次のクラス分けテストを実施します。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にしていただければと思います。

▽冬期講習

α と α 1 クラスでは、既にセンター試験レベルの読解問題を扱っていますが、この冬期講習は全クラスで『大学受験に向けて高校レベルの読解力養成』と題して、読解に特化した授業を行います。GSL の音声も、長文読解問題の配信となります。GNOBLE 流の「前から読んでいく」を徹底して行い、大学入試レベルの語彙もたくさん学んでいただきます。

講習本科では読解しか扱いませんので、特別講座としてこの冬も*EGGS を開講します。EGGS は、4 日間で英語力の基盤となる英文法を全て学習しようという講座です。365 本の基本例文を GSL 配信します。

*EGGS: English Grammar Green Session for newcomers「新入生のための基礎英文法講座」。高校生から GNOBLE の通常授業受講を希望する方のために 2009 年度の中3冬期講習から開講。

また、F タームに、EGGS 受講者を対象に、EGGS で学んだことの定着を図り、さらに読解力を養成する 7 回の講座を開講する予定です。EGGS の授業内でご案内します。

▽冬期講習以降

F1 タームの 3 回は「複合関係詞・強調・倒置」、F2 タームの 4 回は「(高校範囲の)比較表現」です。これで、高校範囲まで文法事項は全て一通り学習し終えて、春期講習から高校生です。

来年度の新高1の通常授業は、今年度の中3が開講している水曜と土曜に加え、月曜にも開講の予定です。水曜日は新宿、土曜日は渋谷、月曜日はお茶の水での授業を予定しております。

▼高1

▽クラス分けテスト

E1 ターム 2 回目に実施したクラス分けテストの平均点は 40.8 点でした。新クラスの点数の切れ目は、 α クラス:55 点以上、 α 1 クラス:54 点～45 点、 α 2 クラス:44 点～29 点、 α 3 クラス:28 点以下となります。

冬期講習明けの F1 ターム 2 回目の授業で次のクラス分けテストを実施します。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にしていだければと思います。

▽冬期講習

第 1 日の授業内でテキストを配付します。テキストの単元割は E タームの復習となる『比較表現・仮定法・接続詞・前置詞』です。毎回、プリント演習⇒添削⇒解説を通常授業同様に行います。

講習本科では扱わない、英文の骨組みを作る文法項目を学ぶため、特別講座としてこの冬*EGGS を開講します。EGGS は、4 日間で英語力の基盤となる英文法を全て学習しようという講座です。365 本の基本例文を GSL 配信します。

*EGGS: English Grammar Green Session for newcomers「新入生のための基礎英文法講座」。高校生から GNOBLE の通常授業受講を希望する方のために 2009 年度の中3冬期講習から開講。

また、F タームに、EGGS 受講者を対象に、EGGS で学んだことの定着を図る 7 回の講座を開講する予定です。EGGS の授業内でご案内します。

▽冬期講習以降

F1 タームの 3 回は「否定表現」、F2 タームの 4 回は「特殊構文」です。春期講習からの高2の授業で、文法単元をもう一巡しますが、読解の方に軸足が移せるように、文法はなるべく早く習得し終えたいものです。

来年度の新高2の通常授業は、今年度の高1同様、水曜(新宿)・木曜(渋谷)に加えて土曜(お茶の水と新宿)にも開講の予定です。

(以上本編)

▼参考資料1:GNOBLE 英語科カリキュラム

▽中1:小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキストを配付(⇒の直後はテキストタイトル)

春期講習(4回): スタートダッシュ講座 ⇒アルファベット/スペリングと発音の関係/基本ワード/センテンスの成り立ち

G1 ターム(3回) ⇒be 動詞の文: am, are, is の使い分け 主格と所有格 冠詞

G2 ターム(4回) ⇒疑問詞・複数形・There 構文: 疑問詞を使う疑問文 (代)名詞の複数形 存在文 数量形容詞

G3 ターム(3回) ⇒一般動詞の文: have like, play, study 等 三人称単数 否定文と疑問文 命令文 Let's ~

G4 ターム(3回) ⇒非人称の it・助動詞入門: 非人称の it 助動詞 can, may, must, shall

夏期講習(8回): 動詞1/動詞2/動詞総合/命令文/疑問詞1/疑問詞2/助動詞/現在進行形

E1 ターム(3回) ⇒動詞の過去形: be 動詞の過去形 一般動詞の過去形(規則変化と不規則変化)

E2 ターム(4回) ⇒感嘆文・未来の文: 感嘆文 will と be going to

E3 ターム(4回) ⇒比較入門: 形容詞・副詞 原級を用いる比較 比較級を用いる比較 最上級を用いる比較

E4 ターム(3回) ⇒接続詞入門: 等位接続詞 副詞節を導く従位接続詞(because, when, if 等) 名詞節を導く that

冬期講習(4回): 動詞と時制1/動詞と時制2/助動詞/比較

F1 ターム(3回) ⇒不定詞入門: 副詞用法(目的と原因) 名詞用法(SとCとO)

F2 ターム(4回) ⇒文型入門: 品詞 文の要素・句と節 SV, SVC, SVO SVOO, SVOC

中1のE4まではひたすら文法を学習します。冬期講習から読解を導入します。
授業の最初の演習プリントと最後の dictation のお帰り問題で、定着度を確認しています。

▽中2:小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキストを配付(⇒の直後はテキストタイトル)

春期講習(4回): 動詞と文型/助動詞・時制/現在完了入門(前編)/現在完了入門(後編)

G1 ターム(3回) ⇒不定詞・動名詞: 名詞用法の不定詞 動名詞 形容詞用法の不定詞 副詞用法の不定詞

G2 ターム(4回) ⇒文型: SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC

G3 ターム(3回) ⇒受動態入門・現在完了・接続詞: 受動態入門 現在完了 接続詞

G4 ターム(3回) ⇒関係代名詞と分詞入門: 主格の関係代名詞 目的格の関係代名詞 分詞の形容詞用法

夏期講習(8回): 文型/不定詞1/不定詞2/動名詞・分詞/受動態/現在完了/比較/関係代名詞

E1 ターム(3回) ⇒準動詞: 名詞の働き 形容詞の働き 副詞の働き(初出の*分詞構文を含む)

E2 ターム(4回) ⇒接続詞: 相関接続詞や名詞節を導く if, whether を含む

E3 ターム(4回) ⇒疑問文: 修辭疑問 付加疑問 間接疑問

E4 ターム(3回) ⇒関係代名詞: *what と*非制限用法を含む(初出)

冬期講習(4回): 中学英語の完成: 動詞とその周辺/不定詞・動名詞/分詞・関係代名詞/比較他

F1 ターム(3回) ⇒関係副詞・前置詞: *関係副詞初出 前置詞を体系立てて扱う

F2 ターム(4回) ⇒文型—復習と応用—: *原形不定詞初出

中2G4で「文科省学習指導要領中学範囲」が一通り修了。テキストやプリントで毎回読解を扱います。

Eターム以降は復習をしながら高校範囲の文法事項(*付きの事項)へと踏み込んで行きます。

授業の最初の文法演習プリントと最後の dictation のお帰り問題で、定着度を確認しています。

▽中3:小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキスト(前半は文法テーマ別・後半は出題形式別)を配付

春期講習(4回): 不定詞/動名詞・分詞/受動態・現在完了/関係詞

G1 ターム(3回) ⇒文法テーマ別:品詞と文の要素・文型 出題形式別:文法・語彙・読解

G2 ターム(4回) ⇒文法テーマ別:名詞相当語句 出題形式別:文法・語彙・読解

G3 ターム(3回) ⇒文法テーマ別:形容詞相当語句 出題形式別:文法・語彙・読解

G4 ターム(3回) ⇒文法テーマ別:副詞相当語句 出題形式別:文法・語彙・読解

夏期講習(8回): 不定詞/動名詞・分詞/受動態/完了形/関係詞/接続詞/話法/前置詞

E1 ターム(3回) ⇒文法テーマ別:助動詞(法助動詞全て 助動詞の過去形) 出題形式別:文法・語彙・読解

E2 ターム(4回) ⇒文法テーマ別:完了形(完了時制全てと準動詞の完了形)と SVOC の文 出題形式別:文法・語彙・読解

E3 ターム(4回) ⇒文法テーマ別:仮定法 出題形式別:文法・語彙・読解

E4 ターム(3回) ⇒文法テーマ別:分詞構文 出題形式別:文法・語彙・読解

冬期講習(4回): 大学受験に向けて高校レベルの読解力養成

F1 ターム(3回) ⇒文法テーマ別:複合関係詞・強調・倒置 出題形式別:文法・語彙・読解

F2 ターム(4回) ⇒文法テーマ別:比較表現 出題形式別:文法・語彙・読解

中3では全クラスで授業内に毎回、和訳問題などの添削を行っています。

大学入試の読解問題を扱い始め、F2までに高校範囲の文法事項を一通り修了します。

授業の最後の Sentences for Workout の dictation は、中学生最後の授業まで行い続けます。

▽高1:小ターム[G1 など]ごとに2冊のテキスト(Grammar & Writing と Reading & Listening)を配付

春期講習(4回): フレッシュャーズ講座(読解・リスニング・作文・文法)

G1 ターム(3回) ⇒Grammar & Writing 1:不定詞 Reading & Listening 1

G2 ターム(4回) ⇒Grammar & Writing 2:動名詞・分詞 Reading & Listening 2

G3 ターム(3回) ⇒Grammar & Writing 3:分詞構文 Reading & Listening 3

G4 ターム(3回) ⇒Grammar & Writing 4:関係代名詞 Reading & Listening 4

夏期講習(8回): 不定詞・動名詞・分詞・分詞構文・関係代名詞・関係副詞・複合関係詞

E1 ターム(3回) ⇒Grammar & Writing 5:比較表現 Reading & Listening 5

E2 ターム(4回) ⇒Grammar & Writing 6:仮定法 Reading & Listening 6

E3 ターム(4回) ⇒Grammar & Writing 7:接続詞 Reading & Listening 7

E4 ターム(3回) ⇒Grammar & Writing 8:前置詞 Reading & Listening 8

冬期講習(4回): 比較表現・仮定法・接続詞・前置詞

F1 ターム(3回) ⇒Grammar & Writing 9:否定表現 Reading & Listening 9

F2 ターム(4回) ⇒Grammar & Writing 10:特殊構文 Reading & Listening 10

高1になると GSL が長文の音声になり、お帰りの dictation も、長文の穴埋め問題です。

英作文の添削指導を全クラスで行っています。

高2(春期から E4 まで全 39 回)で高1の学習範囲を更に深めつつもう一度学習します。テキストは高1同様、Grammar & Writing と Reading & Listening (GSL 対応)の2本立てです。夏期講習か

らどのクラスでも「要約問題」に取り組むようになります(授業内で添削後、解説します)。

高3(高2の冬期講習から【読解】と【作文・文法】各46回)になると、授業が【読解】と【作文・文法】に別れ、それぞれ2時間行います。どちらの授業でも毎回 Workout すべき GSL を配信し、相当量の宿題[テキスト]と演習[プリント]、添削[要約や英作文]を通じて、万全の英語力を養います。

▼参考資料2: GNOBLE テキスト文法説明部分(太字になっている例文は本編3. で引用)

【中1E4 ターム『接続詞入門』より】

Section 3 that



—Sentences for Workout—

- 01 We know that she is from Okinawa.
…途中省略…
- 08 **We are happy that you saw your mother again.**
- 09 I'm afraid you can't come with me.
- 10 Are you sure that he will win the race?

-
- 01 彼女が沖縄出身であることを私たちは知っています。
…途中省略……
 - 08 あなたが再びお母さんに会えて、私たちはうれしい。
 - 09 あなたは私と来ることができないだろうと(残念ながら)思います。
 - 10 彼がそのレースに勝つと確信していますか。

中1テキストの文法説明部分は Sentences for Workout とその和訳のみです

【中2夏期講習—Day 8『関係代名詞』より】

Section 1 主格の関係代名詞



—Sentences for Workout—

- 01 I know the man who came to see you.
- 02 The man who came to see you was American.
- 03 Do you know anyone who has seen a ghost?
- 04 Anyone who has seen a ghost can become a member.
- 05 The boy that is playing tennis is my classmate.
- 06 The boys that are playing tennis are my classmates.
- 07 This is the dog which bit me.
- 08 The dog which bit me was Bob's.
- 09 I went to the supermarket which opened last week.
- 10 The supermarket which opened last week stays open until midnight.
- 11 I'm looking for a novel that was written by the writer.
- 12 **The novel that was written by the writer won the prize.**

- 01 私はあなたに会いに来たその男性を知っている。
- 02 あなたに会いに来たその男性はアメリカ人でした。
- 03 幽霊を見たことがある人を誰か知っていますか。
- 04 幽霊を見たことがある人なら誰でも会員になることができます。
- 05 テニスをしているその男の子は私のクラスメートです。
- 06 テニスをしているその男の子たちは私のクラスメートです。

…途中省略…

- 12 その作家によって書かれたその小説は、賞を受賞しました。

中2テキストの文法説明部分は Sentences for Workout とその和訳のみです

【中3夏期講習—Day 6『接続詞』より】

Section 4 名詞節を導く従位接続詞



—Sentences for Workout—

- 01 That he is honest is quite certain.
- 02 It's surprising that you have finished the work so soon.
- 03 It's true that life in the city is convenient, but I prefer to live in a quiet place.
- 04 **My first impression was that he was really funny.**
- 05 The dictionary is really helpful, but the only trouble is that it has a few printing errors.
- 06 Do you know that he has been in a hospital?
- 07 I think I've met you before, but I can't remember your name.
- 08 I'm afraid that I will not be free until the examination is over.
- 09 Many people don't accept the fact that they are equal.
- 10 She asked if I felt better.
- 11 She looked around to see if anyone was watching her.
- 12 I don't know whether he will come or not.
- 13 Whether he is rich or poor doesn't matter to me.

- 01 彼が正直者であることはかなり確実だ。
- 02 その仕事をあなたがそんなにもすぐに終わらせたことは驚きです。
- 03 都会での生活は便利なことは事実ですが、私は静かな場所に住むことを好みます。
- 04 私の最初の印象は、彼は本当に愉快な人間だということでした。
- 05 その辞書は本当に便利ですが、唯一の問題は2, 3の誤植があることです。
- 06 彼が入院しているのを知っていますか？
- 07 私は以前、あなたに会ったことがあると思うのですが、名前を思い出せません。
- 08 おそらく、私は試験が終わるまで暇にはならないでしょう。
- 09 多くの人間が、自分たちは平等であるという事実を受け入れない。
- 10 私の気分が良いかどうか、彼女は尋ねた。
- 11 誰かが彼女を観察しているかどうか確かめるため、彼女はあたりを見渡した。
- 12 彼が来るかどうか私には分からない。
- 13 彼が金持ちか貧乏かということは、私には問題ではない。

中3テキストの文法説明部分は、Sentences for Workout とその和訳のみです

Section 6: 関係代名詞—what—

—Sentences for Workout—

- (1) What is important is to do it for yourself.
- (2) This is what everyone wants to know.
- (3) **I don't believe what you've just said.**
- (4) Concentrate your attention on what you are doing.
- (5) She is not what she used to be.
- (6) My sister is interested in what is called pop music.
- (7) He is a great politician, and, what is more, a good scholar.
- (8) Reading is to the mind what food is to the body.

- (1) 大事なことはそれを自分の力でやることです。
- (2) これが、皆が知りたがっていることです。
- (3) 私はあなたがたった今言ったことが信じられない。
- (4) 自分のしていることに、注意を集中させなさい。
- (5) 彼女は、以前の彼女ではない。
- (6) 私の姉はいわゆるポップミュージックに興味がある。
- (7) 彼は偉大な政治家で、そしておまけに、優れた学者だ。
- (8) 読書と精神との関係は、食べ物と肉体との関係に等しい。

関係代名詞の **what** は先行詞をその中に含んでいるので先行詞なしで用いる。(よって、制限用法しかない。) **the thing(s) which** に相当することが多い。例えば①Show me **the thing which** you have in your hand.「あなたが手の中に持っているものを見せなさい。」は②Show me **what** you have in your hand.と同じである。それぞれの文で関係詞が導く節は以下ようになる。

- ①Show me the thing_(Ⓢ) (**which** you have in your hand). ⇒ **which** が導くのは_(Ⓢ)を修飾する形容詞節
- ②Show me [**what** you have in your hand]. ⇒ _(Ⓢ)をその中に含む **what** が導くのは名詞節

▼関係代名詞の **what** は名詞節を導くので、**what** 節は文中で名詞と同じ働きをする。

- (1) [**What** is important]_(Ⓢ) is to do it for yourself.
- (2) This is [**what** everyone wants to know]_(C).
- (3) I don't believe_(Ⓢ) [**what** you've just said]_(O).
- (4) Concentrate your attention on_(Ⓢ) [**what** you are doing]_(O).

注意 Tell me **what** you want. の **what** は関係代名詞と疑問詞の両方の解釈を許す。関係代名詞なら「君が欲しいものを私に教えて」となり、疑問詞なら「君が何を欲しいかを私に教えて」の意味になる。後者は疑問詞が導く名詞節[間接疑問]である。(以下省略…)

高校生の文法テキストに解説があるのは、授業で導入からの説明はもう行わないためです。
 高校生の Sentences for Workout の英文は8割方 GNOBLE の中学生テキストから採っています。

1. 指導理念について

物事を論理的に考えられ、自分の力で問題を分析し、解決する能力を身につけてもらう

私たちは、常にこのことを考え授業に臨んでいます。

皆様に第一志望の大学に合格できる力をつけていただくことはもちろんのこと、大学生、社会人になってからも役に立つものの考え方、見方を身につけていただきたいと考えているからです。

そのために必要な力とは、「基礎力」「表現力」「実践力」の3つです。

① 基礎力：数学における基礎知識について正しく理解し、計算できる力

問題を解く上で必要となる知識（計算法則、定理、公式）を、ただ丸暗記するだけではなく、「どうしてその計算法則や定理、公式が成り立つのか」の証明や類題演習を通して、しっかり考えることで、「使える知識」として吸収していただくことが大切です。

GNOBLEのテキストは単元別に細かく分冊されており、授業を受け復習することで、単元ひとつひとつの知識を確実に定着させることができるように作られています。

さらに、重要単元は繰り返し学習できるようにカリキュラムが組まれています。

② 表現力：自分の考えを正しく表現できる力

実際の入試で得点するためには、自分の考えをしっかりと採点者に伝える力、つまり表現力が必要です。この表現力を養うためには、答案を第三者にしっかりと添削してもらうことが不可欠です。

GNOBLEでは、宿題ノートに自分の考えを表現してもらうことや、授業中の発言や発表、授業中に行う個別添削を通して、早い時期から表現力を養う練習をしていきます。

③ 実践力：問題を解く上で必要な知識を選択でき、それを組み合わせることができる力

各クラスの「基礎力」「表現力」を見ながら、担当者がクラスのレベルを判断し、最適な問題を選択して出題した応用問題をこなしていただくことで、実践力を養っていきます。

ここで大切なのが「あきらめず、自分の力で何とかしようという姿勢」です。内容的には難しい問題が多いと思いますが、問題が解けたときは自信がつかますし、たとえ問題が解けなかったとしても、いろいろ考えて解説を聴くのと、投げ出してただ解説を聞くのでは数学力において雲泥の差が生まれます。

以上の力を養い定着させる為に、なるべく毎日数学に触れるようにしてください。

2. 授業の進め方

GNOBLEでは、より効果的に数学の力をつけていただくために、以下のような流れで授業を行っています。

宿題の解説及び前回までの授業内容の復習 → **新単元の導入** → **演習** → **確認**

▼宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

クラスや学年によって量は異なりますが、必ず毎回の授業で宿題を出すことにしています（ただし講習前の最終授業や講習中は除く）。宿題の目的は、授業で扱った基本事項が理解できているかの確認と、基本事項を踏まえての応用問題にじっくりと取り組んでいただくことです。解説が必要と思われる内容については、次回授業の導入時に解説を行います。

授業の導入として、宿題の解説や前回授業までの復習をすることによって、授業内容をよりしっかりと定着させることが出来ます。また、頭の準備運動的な意味合いもあります。

▼新単元の導入→演習→確認

新しい内容の解説をし、併せて演習を行います。演習を行うことで、解説した内容が正しく生徒に伝わっているか、また問題を解くにあたってその知識を正しく利用できているかを確認し、分かったつもりではなく、「真の理解」を目指します。

また、演習中に教室を回り、答案を確認することによって、個々の理解度を直接確認し、その理解度によって、その日の重要事項をしっかりと確認できる時間を設けています。

▼「ノートをとる」ということ

授業中にノートをとる際に重要なのは、きれいに書くことではなく、「解説された内容を後で自分が見て分かるように書く」ということです。

ただ板書をまる写しするだけではなく、難しいと感じたところは、口頭で解説された内容をより詳しく記入しておくなどの工夫が必要です。

▼宿題について

宿題も授業の一環であることを意識し、しっかりと取り組んでください。

中3までは宿題を提出していただき、チェック及び添削を行っています。宿題をチェックした結果、そのクラスに足りないものが自ずと見えてきますので、足りないと思われる部分については、授業内で復習する際に補うことができます。また、生徒自身も宿題をやることによって、自分に足りない部分を意識した状態で授業を受けることができ、より迅速に弱点を克服できるようになります。

宿題をやる上で大切なのが、分からない問題にも時間をかけて取り組むということです。

分からない問題にあたった時は、授業中にとったノートを参照するなどして、時間の許す限り、じっくりと問題に向き合ってください。しっかりと考えた上で解説を聞くことが重要なのです。

実はテストの時、点数に差がつきやすいのが、難問よりも基本～標準的な問題での失点であり、その問題をしっかりと得点源にできるかどうかは、宿題をきちんとやるかやらないかで大きな差がでるのです。

例えば、中学3年生のαクラスでは、必ず毎回10題程度の大学入試問題を宿題として出しています。すると、1年間で約300題の大学入試問題を解くこととなりますので、1回1回の宿題を軽く考えていると、結果として大きな差が生じてしまうことになるのです。

▼きちんと「出席する」ということ

学年が進むにつれて、一度の授業で扱う情報量も飛躍的に増えていきます。一度の欠席が及ぼす影響も、それだけ大きくなります。

まずは、安易に授業を休まないようにしましょう。

学校行事や体調不良などでやむを得ず欠席してしまう場合は、なるべく早い段階で担当講師に相談してください。

3. 中学数学から高校数学へ

中学数学のうちには是非、やっていただきたいことが、2つあります。

1つめは「計算力」を身につけるということです。高校数学では計算自体が複雑になる上に、立式をし、それを計算できることが当たり前に要求されますから、「しっかり正確に解ける力」が今まで以上に必要となります。また、問題に対して様々なアプローチを考える時間的な余裕も必要となりますので、「速く解く力」も必要となるのです。

この「計算力」は短期間で身につくものではないので、中学生のうちから計算問題演習を軽く見ることなく、正しく速く解くことを心掛けてください。

2つめは「数学的なものの見方を身につける」ということです。これは、最初に述べた3つの力のうち、「実践力」にあたる部分になるのですが、問題を解く時にどこに注目したらよいかを考えること、式が表わしている意味を考えること、出題者の意図をくみ取ることなどです。

基礎力をつけていくと、たくさんの知識の引き出しが出来ます。しかし、実際の試験で問題を解く時には、どの引き出しの知識を使ったらよいかをより迅速に、正確に判断することが大切です。高校数学の内容にはいると、身につけなくてはならない知識の量が圧倒的に増えます。その知識がひとつでも欠けると解けない問題が出てきてしまうため、高校数学では、まず、それぞれの知識をきちんと定着させていくことに、より多くの時間をかけていただきたいと考えています。ですから、比較的時間に余裕のある中学生のうちに、この「数学的なものの見方」「実践力」を身につけておくことが大切なのです。

もちろん高校数学でも「数学的なものの見方」を養うような問題は取り扱っていきませんが、中学数学のうちからこの力を養っておくことで、余裕をもって高校数学に臨むことができるでしょう。

次に高校数学を学習していく上で、意識して取り組んでいただきたいことを2つ紹介いたします。

1つめは「答案にまとめる」ことを意識するということです。

「答案を仕上げる」という力は、一朝一夕には身につけません。

高校数学に取り組み始めたばかりの時期には、「計算式の羅列」に終始する答案が数多く見受けられます。

まずは基本的な例題からでもいいので、実際に自分の力で、「数式だけではなく日本語を用いて自分の考えをまとめる」ことに、意識的に取り組んでみましょう。そして、特に慣れていない段階では、なるべく添削を受けて第三者に“表現として適切かどうか”チェックをしてもらうように心がけてください。

2つめは「理由」にこだわるということです。

「ミスした理由」にこだわることで、ミスを防ぐための効果的な手法の習得や、自分の

ミスの傾向を把握することにつながり、ミスは減らせます。

そして「解けた理由」「解けなかった理由」にこだわることで、自分の解法だけでなく他の解法に対する視野が広がり、実践力が培われていきます。

また「減点された理由」にこだわることで、数学的に正しい表現や、自分の考えを採点者に伝える、という姿勢が身につけていきます。

4. 大学入試における数学の現状分析

▼センター試験

国立大学の入試では、ほとんどの場合、センター試験と各大学独自作成の2次試験の合算で合否を決定します。また、順天堂大学（医学部）や早稲田大学（政治経済学部・商学部など）をはじめとして、私立大の入試においても、センター試験の結果を利用できる形式が多数あります。

センター試験は、下記のように毎年出題の大枠がほぼ決まっています。

■ 2011年度センター試験・数学の出題単元と配点

	数学Ⅰ・A	配点	数学Ⅱ・B	配点
大問1	(1) 数と式	20点	(1) 三角関数	30点
	(2) 集合と論理		(2) 指数・対数関数	
大問2	2次関数	25点	微分法・積分法	30点
大問3	図形と計量	30点	数列	20点
大問4	場合の数・確率	25点	ベクトル	20点

※ 数学Ⅱ・Bについては、大問5：「統計とコンピュータ」（配点20点）、大問6：「数値計算とコンピュータ」（配点20点）とあわせて、大問3～6から2つを選択する形式です。

■ 過去5年度平均点推移（大学入試センターHPより）

	H.23年度	H.22年度	H.21年度	H.20年度	H.19年度
数学Ⅰ・A	65.95	48.96	63.96	66.31	54.06
数学Ⅱ・B	52.46	57.12	50.86	51.01	48.94

① 数学ⅠAについて

平均点が大幅に上がりました。というよりも、例年並みに戻った、というのが正しいでしょう。差がつきやすいのは、「図形と計量」「場合の数・確率」です。この単元の平均点が年度による平均点の上下と直結しているといえます。

「図形と計量」では、一般に“難しい”とされる（平均点の低い）問題でも、問われる知識自体が難しくなる事はなく、計算処理の量、および図形に対する複数の定理・公式の使い分け（＝視点の切り替え）が難易差を決めているように感じます。正確かつ迅速な計算力に加え、常日頃から、複数の定理・公式を状況に応じて要領よく使い分けられるよう、良問にじっくり取り組むことが対策として効果的です。

「場合の数・確率」では、出題されるテーマ自体は最終的に「期待値を求める」というもので、ほぼ変化がありません。センター独特の、長めの問題文に対して、出題・誘導の意図を汲み取れる数学的読解力と、計算の量を圧縮する“要領の良さ”（今年は出題

されませんでした。が、テーマによっては結局、効率よく数え上げてしまったほうが確実な場合もあります)が鍵を握るといえます。

② 数学ⅡBについて

なんと言っても、時間が不足気味になりがち。毎年多くの受験生から「時間が足りない」という感想(嘆き?)を聞きます。処理速度が問われます。

一般に、関数分野である前半2つの大問については、対策を十分立てることで計算量の圧縮やスピーディな処理に特化することが可能です。

「数列」は、例年に比べ計算量がやや多く、<数直線上の点の座標に対して、三項間漸化式を誘導に乗りながら解く>という設定も目新しいものであり、受験者は戸惑ったかもしれません。今年の平均点の下がった主な理由は、この問題にあるのではないかと考えます。

「ベクトル」は、“空間ベクトル”が5年連続で出題されています。ある程度は出題傾向が限定されており、例年問題文の誘導も丁寧ですが、それでも苦手とする生徒の多い単元です。

「センター試験は、簡単なもの」「基本的に満点が取れるはず」という、甘い考えの生徒が毎年目立ちますが、2次試験の一般的な問題と比較しても、問題の難易度や計算量は決して劣るものではありません。

しかし、問題文のクセや出題傾向が独特であるため、「十分な対策を立てれば」高得点を狙うことが可能ともいえます。

もともと数学という科目の特性上、ひとつの問題を解く(=点数を得る)までにかかる時間がほかの科目に比べて長く、またひとつの問題の答えの数値を後続の問題で複数回利用する局面も多いため、【一個のミスが大失点につながりやすい】という危険性を常に持ち合わせています。<テストで一番失敗しやすい科目>が数学といっても過言ではないのです。

受験直前期には、センター試験用にも十分な対策が必要であることは、早い段階で認識しておくべきでしょう。

▼2次試験・一般入試

一方で、国公立大学の2次試験や私立大学の一般入試で出題される大学独自試験は、(当然ですが)試験時間、問題数、出題形式、難易度、単元の傾向など多岐にわたります。(別表参照)

出題傾向などは、突然変化することも大いにありえますので、あまり早い段階から偏った対策を立てるのは得策ではない、と考えます。

一般的にどの大学でも高い出題傾向にある単元は、「整数・確率・数列」といった、個数の処理に関する単元と、「関数・軌跡・微積分」といった解析的な単元です。特に、理系の入試では「数Ⅲ微積分」は必須とあっていいでしょう。

また、センター試験のように大枠が決まっているわけではないので、「具体的にその問題を解くにはどの単元の知識を利用すればよいのか?」を、自ら選択することになります。さらには、複数の単元を融合させた問題も数多く出題されています。

つまり、各単元の学習を個別に終えただけでは不完全であり、融合問題への応用力を磨く訓練が別に必要です。

2011 年度主要大学（理系）・数学入試出題傾向

<国公立編>

大学 (試験時間)	ⅢC/ 全問	2011 年度入試分析
北海道大 (120 分)	2/5	B レベル・典型題が多く、高得点勝負は必至。時間配分がカギになる。今年も完答可能な問題を確保した上で、どれだけ部分点が稼げたか。 頻出テーマ：行列、図形、確率、数列、数Ⅲ微積分
東北大 (150 分)	2/6	昨年の難化から一転易化し、例年のレベルに戻る。しかし、例年計算量も多く、論証力も必要とされる。焦らず落ちついて粘り強く完答を目指したい。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分、連立不等式と領域、行列、ベクトル、確率
東京大 (150 分)	3/6	今年は難易差の激しいセット。③(2)、⑥(3)と数Ⅲの難問が出た（たまに処理量過多の数Ⅲが出題される）が、ここでは差はつきにくい。むしろ①、④の完答可能な問題をしっかり確保できたか、が合否の分かれ目。 頻出テーマ：確率・数列・整数と論証、図形、求積問題
東京工業大 (150 分)	3/4	今年は典型題の出題が目立ち、最後の難しすぎる④(1)を除いて、残りは完答者も多かったはず。高得点勝負は必至。なお④(2)は(1)を無視しても解ける。この問題を確保できたかどうかで大きなアドバンテージになったはず。 頻出テーマ：整数、図形と論証、軌跡、数Ⅲ微積分、評価と極限
千葉大・医 (120 分)	2/5	例年 I A I B 色が強い傾向。今年は⑫(確率漸化式)は完答が至上命題。⑬(高次方程式)、⑭(不等式証明)、⑮(座標上の図形と数式)といった頻出テーマでどれだけ健闘出来たか。過去問に基づく入念な対策が功を奏したであろう。 頻出テーマ：整数、確率、軌跡・領域図示、座標と図形
筑波大・医 (120 分)	4/6	例年 B レベルや典型題が多く、(特に数ⅢC は) 類題演習量がものを言う出題。誘導は丁寧だが、計算量は割と大目なので、独力で解き終える計算力が必要。学科により指定問題が異なり、医学群は後半 3 題から 2 題選択の計 5 題解答。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分(不等式証明・求積)、行列と 1 次変換、2 次曲線と軌跡
東京医科歯科大 (90 分)	2/3	昨年から難化し、例年のレベルに戻る。③は数Ⅲの典型題。これは完答したい。②(図形量の解析)は後半の計算が重く、①(確率漸化式)は慶應医学部で頻出。例年、長めの問題文が特徴で、すばやく正確な情報把握が必要。計算量も多い。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分、整数・数列・確率、図形(座標・ベクトル)
横浜市立大・医 (120 分)	5/6	05 年より、医学部は専用出題形式。例年①が小問(穴埋め形式：今年は 4 問)。ⅢC 重視型。①は【一見“難しそう”だが実際はそうでもない】ことが多い。今年も①、典型題の②は確保した上で、やや発想を要する③が合否の分かれ目。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分、行列と論証、関数、整数・数列
群馬大・医 (120 分)	2/5	医学部は専用セット。例年、I A I B 色が強い傾向。標準的な出題が多く、今年も高得点勝負は必至。まずは完答できる問題をしっかり確保することが重要。 頻出テーマ：整数・数列・場合の数などの個数の処理、関数、図形
名古屋大 (150 分)	2/4	昨年度から選択問題がなくなった。漸化式の応用問題が頻繁に出る。③(2)、④(2)は完答しにくい。長時間の分、計算量も多く、粘り強く解く力が必要。 頻出テーマ：確率・行列と漸化式、整数、微積分、図形、大小比較・不等式
大阪大 (150 分)	3/5	例年計算量、単元とバランスのとれた出題だが、今年は難化。①を完答した上で残りどれだけ中間点が確保できたか。②は類題が日本医科大で 06 年出題。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分(面積・体積)、整数、図形
京都大 (150 分)	2/6	問題文が短いのが特徴。きめ細かい論証力が問われる出題が多い。今年も難易差が激しかった。①～③は完答が至上命題。その上で④(数列)、⑤(空間図形)のいずれかを確保したいところ。 頻出テーマ：微積分、整数・数列、図形とベクトル、行列

<私立編>

大学 (試験時間)	ⅢC/ 全問	2011 年度入試分析
慶応大・医 (100 分)	4/6	<p>①が小問集、全体で大問4題、大半は空所補充形式、記述形式は1問だけ。時間に対し計算力が非常に多く、処理能力が問われる。数学ⅢCの範囲を中心に発展的内容の知識が優位に作用する出題も目立つ。本年度はしばらく続いできた「確率漸化式」が出題されなかったが、確率と数列の融合問題は例年出題されている。</p> <p>頻出テーマ：長文の確率漸化式（必出）、数Ⅲ微積分、2次曲線、行列</p>
慶応大・理工 (120 分)	3/5	<p>年度ごとに難易度の波が見られ、2010年は易、2011年は難。大半は空所補充形式、記述形式は1問だけ。出題内容は、確率・ベクトル・微積分・数列などが中心で、ここ数年一貫している感がある。</p> <p>頻出テーマ：数Ⅲ微積分、数列、場合の数・確率、ベクトル</p>
早大・理工 (120 分)	2/5	<p>抽象的な数式処理が多いのが特徴。確率、座標、微積分、ベクトルなどを中心に幅広い内容が出題され、一見、典型問題に見えるが、その考え方をしっかりと理解していないと歯が立たないような問題が少なくない。</p> <p>頻出テーマ：数Ⅲ微積分、座標幾何、場合の数・確率、数列</p>
慈恵会医大 (90 分)	2/3	<p>①は小問×4（三角比、確率は例年通りだがIA範囲の証明が入った）、②③はⅢCの内容を中心とした記述式の問題で計算量も多く、また、証明問題も出されるため時間内に解き終えるには相当な実力が必要か。なお、2011年は珍しく「行列と一次変換」が出題されていない。</p> <p>頻出テーマ：数Ⅲ微積分（有名事実関連が多い）、確率、いろいろな曲線</p>
日本医科大 (90 分)	2/3	<p>2009年より大問3題（①のみ空所補充）となり、ここ2年、小問集合が出題されていない。3題いずれも計算量も多く、また、難易度も高いので完答するのは、かなり大変。各大問の前半には比較的平易な小問も含まれるので、それらを確実におさえた上で、どれだけ得点を重ねられるかだと思う。</p> <p>頻出テーマ：数Ⅲ微積分、座標、図形</p>
順天堂大・医 (70 分)	4/7	<p>③を除いてマーク形式。例年、①が小問集。今年も計算量が多く、時間との戦いは必至であり、①では、ⅢC範囲の発展的知識があると即時に答えがわかるような問題も時折見られるので、マーク式であることを逆手にとって答えだけを要領よく得られるようにしておくことも有効か。③は、ここ数年、定義を記述させたり、有名な定理・公式を導出させたりする問題が続いている。（今年も剰余定理）</p> <p>頻出テーマ：数列、二次曲線、数Ⅲ微積分</p>

<文系編>

大学 (試験時間)	2011 年度入試分析
東京大 (100 分・4 題)	<p>全問記述形式。例年通り“目的に応じて各単元の基本知識を組み合わせる力”を問う出題。問題ごとの難易差が大きく、見極めが大切。</p> <p>頻出テーマ：確率、整数、図形、関数（特に値域・領域）</p>
一橋大 (120 分・5 題)	<p>全問記述形式。例年通り、整数、微積分、確率、図形が出題された。毎年、文系としては質・計算量ともに高いレベルが要求される。</p> <p>頻出テーマ：確率、整数、微積分、図形</p>
慶應・経済 (80 分・6 題)	<p>3 問マーク、3 問記述形式。典型的な問題が多いが、80 分に対しては量が多い。今年も領域における最大・最小が出題された。定積分で表された関数も頻出テーマ。</p> <p>頻出テーマ：ベクトル、微積分、数列、確率</p>
早大・政経 (60 分・4 題)	<p>マーク形式と記述形式の融合。標準・基本レベルの問題が多い。ただ、時間は短いので、素早くしっかりした答案を仕上げられることがカギになる。</p> <p>頻出テーマ：場合の数・確率、整数、数列</p>

5. 実際の入試で求められるもの

実際の入試で出題される問題には、出題者の意図があります。ここからは、入試の際に求められる数学力について、少し具体的にご説明したいと思います。

▼発想力

入試で最も出題頻度が高く、また苦手とする生徒の多い単元として「確率」「整数」「図形」が挙げられます。また、今春のセンター試験の難化の主たる要因のひとつとして「図形問題が難しかった」という意見も多く見受けられます。これらの単元の鍵を握るのは、一般的には「発想力」や「数学的センス」といわれることが多いようです。

それでは「発想力」とは何なのでしょう？

それは主に「**着眼力**」と「**解法設計力**」だと考えられます。

・着眼力＝“経験に裏打ちされた感覚”

特に「確率」や「整数問題」「図形問題」では、問題を一読したときに、“着目すべきポイント”がわからず、「数式すら立たない」「見当違いな部分に着目して、全く役に立たない条件式しか立てられなかった」といった“与えられた状況・条件を数式化する”という、いわば“スタート段階”で煮詰まってしまう局面が多いようです。さらに、この類の問題は、スタート段階で有効な手法さえ思いつけば、あっさり解けてしまうことも少なくないので、逆に言えば、“スタート段階で手も足も出なかった”状態で解答を見ると、「この発想にいたる理由がわからない」「自分にはこの手の問題はたぶん解けるようにはならない気がする」となり、その単元自体に苦手意識を持ってしまうことになるのです。

このような“スタート段階”での局面を打破するには、状況を正確に分析し、解法の糸口を見つける力が必要です。

では、この類の問題が得意な生徒は、どうして解けるのでしょうか？彼らは、“限られた試験時間の中に”、しかも“全くのオリジナルの手法を”、唐突に思いついたのでしょうか？

そんなことはまずありえません。突き詰めていくと、過去の類題経験に基づいて、その手法をうまく組み合わせて応用しているに過ぎません。結局のところは、経験値の差なのです。

ただし、ここで重要なのは、経験の質です。

単に問題が解けた／解けなかったという結果のみにこだわるのではなく、「なぜこの解法で解けるのか？／解けないのか？」という具体的な理由にまで踏み込んで理解しなくては、次回以降にその経験を活かすことができません。

いわば“良質な経験”を数多く積むことで、数学的な視野は確実に広がり、知識も有用性が高まります。これこそが「着眼力」「数学的センス」の源なのです。逆に言えば、せっかくの良い問題を、十分な検証をしないことで無駄に通り過ぎてしまうことがとても多く、経験が有効に積み上げられるか否かは、その生徒の価値観によるところが実は

とても大きいのです。「なんとなく解けた問題」よりも、「解けなかったが間違えた理由を深く理解した問題」の方が、その問題を通じて得られる「経験値」ははるかに大きいといえます。

これはよく生徒に話すことですが、「センス」という言葉の正しい訳は「感覚」です。何も、「生まれつきの天賦の才」のことを指す言葉ではありません。

例えば、「赤信号は危険だから立ち止まる」というみんなが持ち合わせている「感覚」は、生まれたての赤ちゃんにはありません。日常生活の経験に基づくものです。「数学的センス」も、このように経験に裏打ちされた“感覚”に過ぎません。

・解法設計力＝“知識を組み合わせる・使いこなす力”

大卒の決まっているセンター試験は別ですが、ほとんどの入試問題を解く際には、「具体的にどの単元の知識を活用すればよいのか？」を自ら選択することになります。

例えば、東大では「図形」に関する問題がよく出題されますが、図形問題に対する解法として利用可能な代表的“ツール”は「ベクトル・三角比・座標設定」が挙げられます。丁寧な参考書では、各ツールを利用した場合の解答例として、複数の解法を紹介しています。同じ解答に行き着くのであれば、当然一番処理が少なくて楽に解ける手法を選ぶべきです。難しい問題になればなるほど、この「解法の選択」の判断が難しいのです。

また、東大や慶應医学部で頻出の「確率漸化式」は、本来「数列」という単元で習得する「漸化式」の知識を「確率」の単元に応用した問題です。このように、複数の単元の知識を融合させて解く問題も数多く出題されます。

これらの問題は、「単なる基本例題・典型問題の丸暗記」では通用しません。

“ベストと思われる解法を選択し、それを組み合わせることで解答にいたる道筋を自ら設計する”力が必要になります。

入試では、この能力を試す出題が非常に多く、また一番差がつきやすいのです。

「解法設計力」は、具体的には主に次の2つの要素から構成されます。

- ・各単元の基本知識について、それぞれの「手法の特性」を把握している。
- ・問題の求める最終的な到達地点を常に意識し、「目的意識」を持っている。

基本ツールのインストールを一通り終えてからでないと、「問題を解く際に、どのようにツールを組み合わせるのが効果的か？」という訓練は意味を持ちません。

GNOBLEでは高校3年生の1年間を、より複合的で実戦に近い問題を継続的に取り扱っていくことで、この能力の育成に充てています。この最後の1年間の“実戦演習”を、より効果的にするためには、実は基本単元の知識の習得時に「どのように基本ツールをインストールされたか？」がとても大切です。

単に“知っている・覚えている”だけではなく、“使いこなせる”知識に昇華させるには、インストール時に、「手法の特性」(＝知識の有効な使いどころ)を十分意識した上で、知識を整理することが重要なのです。

▼数学的論述力＝“正しい表現で相手に伝える”

数学の試験における解答形式は、大別するとセンター試験や一部の私大入試に代表

される「マークシート形式」と、国公立大の二次試験や一般入試で用いられる「記述形式」の2種類になります。

「記述形式」では、問題に対する解答を白紙の答案に論述していくことになり、数学的に正しい表現で、しかも採点者に伝わるように丁寧に、自らの考えを述べる力が必要です。

この力が受験生はなかなか育ちません。特に数学では、

- ・解法を説明する上で省略してはいけない言葉や途中式を書いていない。

- ・数値自体はたまたま当たっていても、実は途中の立式は全くの見当違いである。

などと言った、「正しいように見えるが論理的には不正確な答案」が数多く見受けられます。(自分では正しいと思って表現した) 答案を第三者がチェックしない限り、このような論理の不備には気づけませんから、「添削」が必要不可欠になります。

しかし、単なる計算問題の数値チェックだけではない、しっかりとした記述形式の答案を作り、しかもそれを添削してもらおう、という機会は、「学校の定期テスト」や「大手予備校の模擬試験」くらいしかないのが現状でしょう。

一方で、いわゆる「添削教材」では、答案を作成した生徒と添削者とのやりとりは、今度は紙面のみになってしまいます。“減点された理由”について、答案に書かれた赤ペンの文字だけで常に納得できるとは限りません。実際、日々添削のやりとりに関する生徒からの質問はとて多いのです。

このように、「答案を作成する」→「第三者が添削する」機会をマメに設け、さらに不明な点に関しては質問ができる、という環境があつてはじめて「数学的論述力」の育成が可能になります。GNOBLEでは、授業担当者が添削を行っていますから、同じ生徒の答案を同じ添削者が一定期間担当するので、一人ひとりの生徒の傾向やクセにまで踏み込んだ効果的なアドバイスもできますし、全体に多いミスや傾向については、授業を通じて発信することができるのです。

▼計算力＝“修正力”

正しい数値を導き出すためには「計算力」が必要です。

計算ミスをしたときに、大抵の生徒は「どうしてミスをしたんだろう」と後悔をします。それでは、数学の得点能力の高い生徒は絶対にミスをしなんでしょうか？

決してそんなことはありません。どんな生徒でも、人間は必ずミスをします。いわゆる“優秀”な生徒たちほど、自らのミスに対して敏感なのです。彼らは自分のミスの傾向を知っていて、常に多角的に検算をし、実はその都度、ミスをすばやく自己修正しているのです。

つまり、ミスを防ぐのではなく「ミスに気づく力」こそが、正確な計算力の根源にあるのだと考えます。そのためには、解答・解法を一方的に受身の姿勢で見聞きしているだけではだめです。「まず、自分で解いてみる」→「正しい解法を確認し、自分の方法と比較・分析する」という試行錯誤のサイクルの繰り返しが必要です。「解きっぱなし」で、解答をしっかりとチェックしない勉強法は、まさに“百害あって一利なし”です。

また、ミスしやすい生徒とミスをしにくい生徒では、多くの場合その具体的な計算方法から差があります。ミスをしにくい効果的な計算手法や、自分が出した数値結果をすばやく確認する検算手法なども授業を通じて、随時紹介していきたいと思えます。

【文責】 1. 2. 3 : 櫻田
4 : 越川、手塚、林
5 : 手塚

1 はじめに

「〇〇さんは国語ができる」

このように人から評される方は、どのような方でしょうか。授業で生徒の方に聞いてみました。出てきた意見は、「読解力がある」「本をよく読んでいる」「ものをよく知っている」「背景をつかんでいる」「文章力がある」などなどです。どれも正解だと思います。しかし抽象的であり、学ぶ生徒にとっても力がついたと実感しづらい項目が並んでいます。

さらに、ここには重要な点があります。実はこれらに該当していても「国語ができる」と言われない場合があるのです。現実的な発言ですが、一つ当然すぎるにもかかわらず、見落としがちなポイントがあります。

現実問題として、国語のできる方とは「テストで点が取れる人」、しかも「安定して点の取れる人」ということになると思います。なお、出題範囲が限定されていて、授業内容を踏まえて書くことで点の取れるような、学校の定期テストは、ここでいうテストではありません。過去、解答欄を埋めてさえいけば0点とはならないという定期テストがあったと聞いたことがあります。それは「励まし」にはなっても、本人のためになるとは全く思えないと感じました。やはり、未知の文章を読み自力で正解となる解答を出すことが求められるテストを対象にして考えたいものです。

では、安定して点が取れる人とはどのような方でしょうか。逆に考えると、点が思うように取れない場合、原因はどこにあるのでしょうか。

その前に、まず国語という科目の特徴を考えておくべきだと思います。

2 「国語」のとらえ方

国語という教科はその特徴から以下の2種類に分けられると考えています。

①鑑賞の国語

「味わう国語」「感性を磨く国語」とも表現できるでしょう。実際に文章を読み、その奥に秘められたもの、すなわち行間をとらえ、味わう力を養うような国語です。

ただ、この力を養うことは教養の範疇に入り、受験に直接的に役立ちません。逆に「行間を深読みする読み方が文章の読み方なのだ」と勘違いしてしまい、得点力が安定しない状態に向かってしまう恐れもあります。子供の頃本を読むのが大好きで活字に親しんでいたにもかかわらず、中学高校で、特に大学受験において得点が取れない方は、国語について、ここでいう「鑑賞の国語」を国語の全てと考えてしまい、次にあげる②をあまり意識できない場合があるのではないかというのが自分の意見です。

ただ、特に一貫校に通っている方にとって、中学時代は「鑑賞の国語」に親しむことも大切だと思います。大学受験には直結しないのですが、国語という科目に親しみ、言語に

よる表現を豊かにし、ひいては精神生活を豊かにするためにも「鑑賞の国語」は重要な位置づけにある科目と思います。

②情報処理の国語

いわゆる「受験国語」と表現できます。国語の読解問題において、課題文の前に必ず「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」というような表現が、書かれています。これは、「本文に書いてあることだけを根拠にして問題にあたりなさい」、あるいは「本文に根拠を見いだせない問いは決して出しません」というメッセージであると理解すればよいと思います（次の項目でもう一度整理して説明します）。ここで注意すべきことは書かれていないのに「きつこういうことだろう」「確かこのようなことが書いてあったはずだ」と曖昧に想像力を広げて設問にあたってはならないということです。受験問題を解く上で必要なのは「書かれてあることのみを手がかりにして、聞かれていることのみで答える」ことです。正確な情報処理能力が求められているのです。そうすると上記①の力が十分に備わっている方にとって、実は受験問題において求められていることは「浅い」内容にとどまっていると気づき、物足りなく思えるかもしれません。しかし、そもそも言語とは、書いてあることを正確に読み、それを手がかりに情報処理するという一面がなければなりません。

「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」

確かに「書」、つまり書かれたものは全てを語りきってはいないのですが、情報処理にあたっては、やはり「書」を情報の全てと考えておきたいものです。まず、「相手（作問者）が求めているものを、求められているだけ提供する」という、情報処理に徹した答え方が大切なのだということを意識しましょう。

以下、「情報処理の国語」について述べます。

3 「情報処理の国語」を学ぶ上で意識したいこと

さて、では改めて実際にどう学べば良いか、考えてみます。

前の項目にも挙げた内容で、また、過去誰もが見たことのある表現でしようが、

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」

国語の読解問題冒頭に必ず書かれている内容です。実は、国語の学習に必要なことの全てが、実はここに示されていると思います。表現の前半と後半に分けてその意味を考えてみたいと思います。

・「次の文章を読み」

つまり、正確な「文章理解力」です。

決して「次の文章を読まないで」と書かれることはありません（当然です）。よって、文章内容を正確に理解することが前提となります。

この部分でつまづいてしまう原因（つまり何をしなければならないのか）

- ①語彙力の不足。
- ②物事についての常識・背景を理解が蓄積されていない。
- ③文法が定着していない。（古典分野のみ）

以上の3点について力をつけねばなりません。①と②は実感がわきづらい項目ですが一つ一つ積み上げましょう。①の充実のために必要なのはやはり質の高い活字（言語）に触れる量ということになります。②は非常に重要です。「論点の把握」とも表現できますが、評論系の文章を読むときに、論点を知っていること、つまり、現在どのようなことについてどのような意見があるのかは理解を積み重ねておきたいものです。受験における評論文は時事的な内容を踏まえた文章も目立ちます。日々のニュース等に興味を持つという考えも必要です。③について重要なのはコツコツと「やらない」ことだと考えます。時間を区切って一気に全容をつかみ、定着のために実際の文章に触れながらチェックを繰り返し定着を図る、という形式をお勧めしています。文法学習のみコツコツやっていたのでは、正直無味乾燥なつまらない学習に陥ってしまいます。あくまで実際の文章に触れていき、現段階で何が足りないか、何をすればよいかをチェックしながら学習を進めたいものです。

まず読んでみる



よくわからなくて困る



何を参照すればよいか、何を調べれば解決するかわかる



反復する中で定着する

幼児に対していきなり補助輪無しで自転車に乗るのを強要するような乱暴な提案に見えるかもしれませんが、未知の文章を読む上での心構えも養成でき、受験問題に対するときにも役立つと考えます。

・「後の問いに答えなさい」

つまり正確な解答能力です（現代文授業において、記述問題では、解答の「構成能力」と表現しています）。

問いに答えなくてもよいという出題はあり得ません（当然です）。かならず、求められていることに答えなければなりません。実際にテストにおいて国語ができるということの核心部分はこちらです。与えられた文字情報（つまり文章）を正確につかむこと、つまり「次の文章を読み」に対応する部分では、文章の「執筆者との対話」が求められています。しかし、この段階で求められているのは「他の人物との対話」です。すなわち「作問者との対話」そして「採点者との対話」です。よって、作問者が何を求めているかは当然ながら問題文を正確に読めばわかるのです。そこから作問者が示したサインを見抜くことも大切です。たとえば文章中の傍線部について「どういうことか」と聞かれていたらそれは単な

る傍線部の解釈でしょう。情報处理的に本文の適切な箇所をチェックしたうえで傍線部を分析的に解釈、換言していけばいいことになります。しかし「どういうことと考えられるか」と表現してあったら、「本文にそのまま答となる内容は書いていないですよ」と伝えたいのだ、と考えるべきでしょう。良問では高精度でメッセージが示されているものです。見落とさないようにして取り組みましょう。

設問にあたる時常に意識したいことは

①設問趣旨を的確につかむ。

*本文から手がかりを十分に拾う。

②記述問題のためにも表現力を充実させる。

特に、設問趣旨の把握と、手がかりを拾うプロセスを重視したいものです。「次の文章を読み後の問いに答えなさい」と書いてあるのだから、文章中から手がかりが見つからないことはあり得ないのだと考えて取り組みましょう。

ここまでアドバイスとして、意識していただきたいことを提案してきましたが、実際には苦勞している方が多いのも事実です。その現状を把握して差し上げて、具体的なアドバイスができればと思っています。

授業で生徒の方と触れる中で、苦勞されている方のタイプがいくつか思い当たります。

① 代入型

特に古文に多いのですが、学んだことをそのままあてはめているだけのタイプです。

「点」で読んでいて、「線」すなわち文脈から手がかりを拾って運用する力が養われていない方です。一例を挙げると、古文単語「聞こゆ」には様々な意味がありますが、出てきたらとにかく「申し上げる」と訳してしまうようなタイプです。他の部分に敬語が出てきていないのだから、ここだけ敬語が用いられるわけではない、という全体から手がかりを見つけて考察する「視野」を養成してほしいと考えてアドバイスに努めています。

② ミステリアス型（免罪符型）

「やっても無駄」「やっても伸びない科目だ」と位置づけるタイプ。そうすると努力しなくても良いことになってしまいます。たしかに、特に現代文はすぐに実感がわきづらい科目でしょうが、やっても伸びない科目だったら、そもそもテストに出すべきではありません。芸術的な素養のようなものを求める科目ではないと考えておきたいものです。そもそも国語がテストの科目となっているのは、採点できる要素、得点化できる要素があるからです。つまり、情報处理的な要素があるのです。いいわけを作らずに取り組んでほしいと切に願います。

過去の生徒さんから考えるに、実際、大学受験において全教科が万全の状態では本番に臨む方はきわめて少数だと思います。そうなる手があまりまわらない科目が出てきてしまうものです。特に理系に進む方はそれが国語となる場合も多いでしょうが、特にセンター試験のような情報処理に徹する形式の問題に触れると、ミステリアスでやっても無駄な科

目だという言い訳はできないと気づくでしょう。ある程度真摯に取り組むことは必要です。やっけて報われるから受験科目にあるのです。

とにかく、ただ漠然と「活字に多く触れて読解力を養いましょう」というようなアドバイスは、自分の学力向上が実感しづらく、学ぶ必然性も感じづらくなると思いますので極力言わないようにしています。授業においては、「なぜできなかったか、わかる」「何が分からないか、わかる」「何を調べれば解決するか、わかる」ということを各自に意識してもらい、今後の課題を明確化していただけるように努めています。

授業でお会いする方については、添削などを通してどの部分が不足しているのかをなるべく具体的にアドバイスするようにしていますし、それが使命だと考えます。この姿勢は堅持します。

*以下は事務的な連絡なので常体で記します。

4 スケジュール

大学受験を念頭に置くと、現実的に考えて高3の段階で国語に手が回らないであろうというのが大前提である。よって、高3を迎える前の時期、高1～高2が極めて重要である。

理想的なスケジュールとして提案しているのが、古文を読むために必要な前提事項をおさえ、読む力を徹底、定着させる高1、現代文における解答能力を養成する高2というスケジュールである。高3でも講座は開講しているが、そこでは、前提たる「読み方」「解き方」が確立しているという前提に立って、演習に徹するため、やはり高3になる前の「高1～高2」が重要だと考える。

去年目にした記事だが、10年連続200本安打という記録を達成したプロ野球イチロー選手について「練習の練習に余念がない」と評するコメントを読み感銘を受けた。

高3前にいかに状況を整えておくか、これである。

前述した内容であるが繰り返すと、当塾に通っていただいている方を、過去に担当させていただいた方も加えて考えると、圧倒的に国公立大を目指す方が多い。そうなると、高3では国語にじっくりと時間を費やすことは現実として難しい方が多いということになる。グノーブルでは高3の国語も開講するが、これはあくまで「国語の問題にあたる場を提供し、解く感覚が鈍らないようにすること」が目的であり、体系立てて基礎から解説する授業ではない。

高1から高2までの間に、国語という科目について学習法を確立してほしいと考えている。

古文

基本的な文法事項を学び、さらに演習の中で定着するには1年間と決めて集中的に学んでいくことを提案している。特に理系の方は高3時点で基礎から学ぶ余裕はないと思われる。原則高1で全体像を把握できていて、あとは単語力を充実させながら受験問題にふれて得点力を養うことのみで上の学年にあがってほしいと思っている。

グノーブルのカリキュラムでは、完全に未習状態であるという前提からスタートする。多くの一貫校の方にとっては復習、定着度確認からのスタートということになるがここを軽視しないことが重要である。高校受験を経て高校に進学した方にとって、一貫校のスケジュールに追いつくためにも高1時点の学習が極めて重要だと思う。かなり昔となるが、過去高1で、レベル分けしたクラスの上位を担当した経験があるが、8～9割程度は高校受験を経ていない一貫校の方だった。

いずれにしても、スケジュール的に言うと高1で古文をしっかりやっておくというのは理にかなっていると確信している。

現代文

得点力の充実に特化した授業を行っている。ここでは例として選択肢問題について述べてみる。授業で、以下の手順を徹底できるようにと提案している。

- ①設問趣旨をつかみ、
- ②正答に至るための手がかりを探し、
- ③どういう答が正答として提示されうるかある程度メド立てをし、
- ④各選択肢の要素を吟味し、
- ⑤先入観を入れず無難なものを選び、
- ⑥見直す。

記述問題については、上記の①～②は同様であり、そのあと適切にまとめて行くことができるかを各自の作成答案を添削しながらアドバイスするようにしている。

いずれの形式においても、「正確な言語的情報処理能力の確立」を目指している。

【メモ欄】